

8. 腸性毒血症

この病気は、高齢のウサギではいろいろな細菌によって引き起こされ、若いウサギ（生後4～8週間）では、胃の中に存在している細菌が増殖し、激しい下痢やその他の症状を引き起こします。

この症状は、ウサギが経験する他の多くの細菌感染や胃が原因の病気に似ていることがあります。症状は急性に起こることがあります。抗生物質を投与されたウサギが、正常な胃内細菌叢のバランスが崩れた後に症状に気づくこともあります。

この腸内毒血症は、ウサギが経験する重度の下痢の病気です。生後4～8週間のうさぎに多く見られますが、どの年齢のウサギにも起こりえます。症状は急性で、進行も早いです。死亡したウサギの約半数は、盲腸には出血と浮腫が認められ、盲腸内にはウェルシュ菌（*Clostridium perfringens*）の存在が確認されます。

ウサギの腸性毒素症の症状は、

腸内毒素症の症状は、重症度によって異なります。

下痢・・・うさぎは細菌に感染してから1～7日後に水っぽい茶色の下痢をします。

衰弱・・・元気がなく、全体的に衰弱した状態になります。

呼吸困難・呼吸が苦しくなったり、困難になったりします。

食欲不振・最初の数日間は食欲不振になりやすいので、気づかないこともある。

便秘・・・通常の飲食ができないため、ウサギが便秘になることがある。

歯ぎしり・腹部に痛みを感じ始めると、ウサギは歯ぎしりをすることがある。

食欲不振・下痢が始まる数時間前から見られる。

気管支敗血症菌（ボルデテラ・ブロンキセプチカ）（*Bordetella bronchiseptica*）

この気管支敗血症菌も呼吸器系の病気で、感染した動物との直接の接触やエアロゾル、鼻汁を介して感染します。人からウサギへの感染の可能性もあります。スナッフルに似た症状を呈し、一般的に *P. multocida* との共同感染となります。

治療は抗生物質を使用しますが、この菌類を完全に取り除くことはできません。この菌類は環境中ではかなり脆弱で、除菌剤で簡単に死滅しますが、犬やモルモットも保菌者となります。ウサギは一度この病原体に感染すると、永遠に保菌者となります。

黄色ブドウ球菌 (Staphylococcus aureus)

この厄介な病原体には様々な株があり、病原性は低いものから高いものまで様々で、乳炎、足皮膚炎（足や足首の痛み）、心内膜炎（心臓の心内膜の炎症）、結膜炎（ピンクアイ）、皮下膿瘍などを引き起こす可能性があります。抗生物質による治療は、特定の菌株に合わせて行う必要があります。感染は様々なベクターを介して行われます。

三鷹獣医科グループ・新座獣医科グループ 代表

日本動物病院福祉協会認定の内科認定医

特定非営利活動法人、小動物疾患研究所 理事長 小宮山典寛